

スタッフのひとりごと

週末の訪問者

JVCラオス 森林担当 尾崎 由嘉



イラスト/かじの 倫子

ラオスでの生活が始まって10ヵ月。一息つける週末の午後に、家の庭先で風にあたりながらウクレレを弾く練習を始めた。この下手な音を聞きつけて、今なら私が暇だとわかってか、近所の中学生の女の子仲良し3人組が「何やっているのー?」と門を開けて家に入ってくる。平日は「おはよう。どこ行くの?」と通りすがりに言葉を交わすだけだが、外国人の私に興味津々のようで、時々ひょっこりやって来る週末の訪問者たちだ。

3人は、自分の方が上手くできる、と代わるがわるにウクレレを抱え、

適当に音を奏でて歌い、はしゃぎだす。次の拍子には、私のままならぬラオス語を笑い、発音練習に転じる。今度は「日本語では何と言うの?」と尋ねられ、漢字と共に教えると3人揃って驚嘆の眼。そのうち料理の話になって、「お腹すいたねー」と材料を家から持って来てパイヤサラダ作りが手際よく始まる。そして「食べるよー」とテレビの前に揃って座り、あつという間に皆で平らげ、テレビに見入って共に笑い転げる。自分の家のように寛いだ後、台所を元より

もきれいに片付けていき、「お母さんが呼んでるから帰るねー」と夕日の中を去っていく。

台風が来たような落ち着かない数時間だが、世代が違う彼女たちと過ごす一時は新鮮で発見もある。東京の生活では、こんな風に違う世代の子たちと触れ合う場は皆無だった。忘れかけていた中学時代の友人との日々も、この訪問者たちは思い出させてくれる。

『パレスチナはどうなるのか』

土井敏邦編 岩波書店 480円+税

みるよむきく



七月二十八日、私たちは緊急シンポジウム「内戦と紛争?パレスチナはどうなるのか」を開催しました(主催・JVC、土井敏邦パレスチナ記録の会、参加者・約百五十人)。長くパレスチナと関わってきた専門家、ジャーナリスト、NGOスタッフが集まり、現地からの声を交え、報告・議論をし、土井氏の編集でブックレット

〇七年六月、パレスチナ・ガザ地区では、内部での対立や抗争の激化、またイスラエルによる経済制裁や封鎖は強化されるという事態が発生しました。なぜこのようなことが起きてしまったのか。パレスチナの人々は、どのような状況のなかで、どのような思いで生活しているのか。これからパレスチナはどうなっていくのか。これが中東・国際情勢にどのような影響を及ぼすのか。私たちには何ができるのか。

にまとめました。

『机上の「和平」論ではなく、現場の民衆の目線に立った真の「和平」を——この混沌としたパレスチナの現状は国際社会に改めて訴えかけている。』(あとがきより) 国際社会の一員である日本の私たちにも、このメッセージは投げかけられているのでしょうか。

なお、このブックレットの印税及びシンポジウムの収益・寄付は、ガザ地区への支援として寄付されました。

(パレスチナ事業担当 藤屋リカ)